

「微力でも被災者の役に」

舗装大手の㈱NIPPPO(水島和紀社長、本社：東京都中央区京橋1-19-11)にこの春入社した新卒男性社員34人が多賀城市内で被災家屋の片付けや掃除といったボランティア活動に従事することになった。

34人は3班に分かれ、順次現地入りする。活動期間は1つの班で10日間ほど。第一陣の8人は19日からすでに活動中で、今後班を入れ替えながら、6月3日まで1カ月以上にわたって活動を継続する。

取材した22日の午前中、第一陣8人は二手に分かれ、津波が侵入し内部が泥だらけになった住宅で、家財道具の運び出しや泥の撤去に当たっていた(＝写真)。

住人は高齢の夫婦で、こうした力仕事は自分たちだけでは難しい。

昼休みを挟んで午後からも別の被災家屋で同様の作業に取り組む。

毎日の作業はその日の朝、市役所前の市社会福祉センターに開設されている「災害ボランティアセンター」で割り当てを受ける。

作業場所が決まれば、午前9時には現場に移動し作業開始。午後3時まで続ける。

ボランティア参加は新人に有意義な経験をさせたいとの会社の方針によるもの。本来なら新人には業務研修を受けさせる時期だが、その日程を急ぎよ変更して実施に踏み切った。

横浜市出身で同社東北支店(仙台市青葉区木町通1-5

1)に配属予定の佐藤優希さん(22)は、被災地での活動の機会を与えてくれた会社には感謝しているという。

「被災地の様子をニュースで見るときは涙が止まらなかつた。今ここにいて、微力でも困っている人の力になれている。そのことを個人としても会社の一員としても誇りとしてい一方で、自分たちの力の小ささも思い知らされている。「あまりに大きな災害で、どれだけやっても先が見えないように思えてしまうこともあります」

それが辛い。

訪問した家の住人や地元の人たちからの感謝の声が、大きな励みだ。

「ぼくたち若者が

暗い顔をしていてはだめだと思えます。とにかく元気を出して作業を続けます。そのことで周りの人が

少しでも明るい気持ちになってくれればいいなと思います」

これが終われば建設業として復旧復興に携わることになる。

「道路の建設会社ですから、確かなものづくり、道路づくりで地域に貢献したい」と、力強く語ってくれた。

多賀城市内で片付けに汗



(㈱NIPPPOに今春入社した新人男性社員が多賀城市内でボランティア活動を行っている(津波で家の中にとまった泥の排出作業の様子：大代地区)

NIPPON

新入社員が災害ボランティア

道路舗装最大手のNIPPONは、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県内の被災者を支援するため、2011年度採用の新入社員を現地に派遣し、津波で被災した家屋内の清掃などのボランティア

活動を行っている。19日からスタートしたボランティア活動は、新入社員34人を三つの班に分け、宮城県内の各被災地で支援にあたるもの。1班当たりの人数は10人前後で、派遣期間は

10日間ほど。各班が入れ替わりで被災地に入り、6月3日まで継続して活動する。甚大な津波被害を受けた宮城県石巻市の出身で、自らも被災した新入社員も参加する予定だ。

各班の派遣先は、同社のアスファルト合材プラントがある多賀城市、岩沼市、石巻市の3カ所。各自自治体の社会福祉協議会が設置する「災害ボランティアセンター」で指示を受けながら作業にあたる。

19日から27日まで多賀城市内で活動した第1班は、新入社員8人が参加。津波で被災した家屋内の泥出しや家具、食器類などの清掃作業にあたった。新入社員の一人は「新聞やテレビで被災地の状況を見てい



宮城県内3カ所に延べ34人を派遣

だが、実際に現地に入ると、あまりの被害の大きさにショックを受けた。臭いやほこりもひどく、つらい作業だったが、清掃した家の方からとても感謝され、有意義な活動だったと実感した」と振り返り「これからは建設業界で働くことで、社会や地域に貢献していきたい」と新社会人としての抱負を力強く語ってくれた。

同社では「例年なら新入社員の研修時期だが、東日本大震災の発生を受け急遽、日程を変更した。今回のボランティア活動は、当社の合材プラントがある被災地の地域貢献の一環であり、新入社員にも有意義な経験をしてもらうために取り組むことを決めた」と話している。

今後は、第2班が5月9日から岩沼市に入り、第3班が同月23日から石巻市でそれぞれ活動を開始する予定となっている。